

は分かるのだけれども、なんとなく私はもの足りないんですね、たったそれだけのことなのかと。

「あなたは本当に人ひとりを靈的に救いあげたことがありますか？」

と、そういうことを聞きたい。でも、そのことは彼らに対しては聞いてはいかん。そういうジレンマを感じた次第なんです。結局は自己中心な生き方をしているわけです。

「自分が大事で、自分が成功して、自分が幸せだった」

という。結局、「自分、自分、自分」の世界の中で彼らはそれなりに頑張ってきて、一応社会的にもご褒美をいただいたんでしょ。でも、我々は、「見えるもの」ではなく——彼らにとつてはその見える世界の中で一応成功した人たちだから集まってきたんですね、惨めな人は来ませんわ、そういう所には(笑)——やっぱり、「見えない世界」を求めているわけです。

「見えるもの」と「見えないもの」といいますと、「見える世界」ではなくて、「見えないところ」にキリストがいらつしやる。また、主にあつて召されて往つた、小池先生もいらつしやる、私の妻も孫の翔ちゃんもいる。そういう「見えない世界」と本当に繋がっている。これは私にとつてはリアリティなんです。思われた世界ではない。観念の世界ではない。それは見えないけれども現実なんです。見えないものを現のごとく見ていくという、そういう生き方を私はやってきているつもりです。皆さんもきつとそうだと思う。ですから、そういう見えないものに目を注いで、

「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである」(コリント後4・18)

と、これはコリント後書4章の所の言葉です。それも昨日紹介しました。パウロという人がこういうことを晩年に告白している。

「我々は見えるものではなく見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである。しかも、今の現世とは比べものにならない凄惨な栄光に溢れている」

ということまで言っている。それは味わった人間しか言えないことです。聞いていて、「ああ凄惨なことを言っているな—」

と感じるならまだましです。彼らに全然伝わっていなかったと昨日つくづく思いました。

●見えない神さまを見るかたちで

コリント後書4章から、

「この故に我ら憐憫を蒙りて此の職を受けたれば、¹落胆せず、²恥ずべき隠れたる事をすて、³悪巧に歩まず、神の言をみださず、⁴真理を躪して神の前に己を凡ての人の良心に薦むるなり。もし我らの福音おわれ居らば、亡ぶる



者に覆われおるなり。⁴ この世の神は此等の不信者の心を暗まして、神の像なるキリストの栄光の福音の光を照さざらしめたり。

「神の像なるキリストの栄光の福音」を見えないようにしている。神さまというのはいえない。見えない神さまを見えるかたちで顕してくれているのがイエスというご人格なんです。そこには神の栄光が現れている。でも、人々の目からは隠されている。だから、人々はイエスを十字架につけて殺してしまつたわけですよ。弟子たちだつて本当は分かっている。あとになって初めて分かつたけれども。そういうことがここでも書かれています。

⁵ 我らは己の事を宣べず、ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕たる事とを宣ぶ。⁶ 光、暗より照り出でよと宣いし神は、『光あれ』と言われたら光があつた』と、創世記の一番始めに出てきます。

イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、キリストに神の栄光が現れているんですね。

我らの心を照し給えるなり。

でも、イエスという方をそういう人だとは当時の人は認めなかつたんです、パリサイ人や祭司長やみんなは。

⁷ 我等この宝を土の器に有てり、

日本の作家三浦綾子さんに『この土の器をも』という文章がありますね。「土の器に宝を有てり」と、聖霊という宝をいただいている。

これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。

人間から出てくることは限られて限度がある。けれども、神さまから出てくる力は無限の力なんです。だから、大いなる力は私たちが出るのである。神から出る。そのことが現れるためにこそ、我々土の器の中に聖霊というこの凄い宝をいただいている。

⁸ われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、⁹ 責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰ 常にイエスの死を我らの身に負う。

イエスの死を身に負う。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(ヨハネ12・24)

とキリストは言われたでしょ。その心意気です。

常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。¹¹ それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、

イエスの弟子ということは、常に死んでいくというその覚悟がなければ務まらなかつた。そうでしょ。イエスは宗教上の大悪人として殺された方なんです。その弟子だといつてい



る人はみな同罪なんです。だから、迫害を受けるのは当たり前です。今でこそ、イエスという人にはみな一目置きますよ、信じるかどうかは別として。イエス・キリストを悪くいう人は誰もいない。けれども、当時は宗教上の大犯罪人でしょ。その仲間というのは全部同罪です。パウロだって大祭司から添え文をもらって、イエスの弟子たちを捕まえようとしてダマスコへ向かっていた。その途上で突然に、キリストが現れて、

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と声が聞こえ、ぶつ倒された。パウロは三日間、目も見えない、口もきけない。もちろん、物も食べられない。その地域の信徒アナニヤを通してあんしゅ按手してもらって、

「目から鱗のごときもの落ちたり」

という。「目からうろこ」という言葉の典故は、私はパウロに関するこの記述だと思う。

我ら生ける者の常にイエスのため死に付わたさるるは、イエスの生命いのちの

あのご復活の聖霊の生命、それが

我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。

我々の体は死にます。この死ぬ体にこだわったらいかん。我々はこの世の命にこだわらない。この命はどうせ死ぬ。死ぬべき命の中に聖霊という真の生命が来ているか。来ていれば、それは我々の体がどうなるかということには関係ない。そんなものは脱ぎ捨てて、

「万歳、ハレルヤ、主さまー！」

と言って、天の方へ昇っていく。病気でもう意識のない人のために祈るときに、

「病を癒してください、何々してください！」

ではなくて、

「主さま、あなたのもとへ凱旋するようにお願いします！」

という祈りを私はして欲しいと思う。

「クリスチャンというものはこの世においては常に死にたるもの。イエスにありて生きるもの。そう思え」

とパウロも言っている、「我々はもう死にたるもの」であると。コロサイ書3章に、

「汝らは既に死にたるものにして、生命はキリストの中に隠されてあればなり」

(コロサイ3:3)

と出てきます。ピリピ書もそうです。

「この世の人たちは十字架に敵対して歩んでいる。彼らの最後は滅びである。

涙を流して私は彼らのために祈っている」

というようなことをピリピ書の中に書いてますよ。そういう、涙と共に

「彼らのことを頼みますよ」

という棄身の祈りをパウロは自分の同胞のためにやっている。それが本当の愛国心であり、人を愛するという姿だと思います。だから、私たちもそれ以下だったらダメなんです。



● 光輝高霊者

今のコリント後書です。

常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命いのちの我らの身にあらわれん為なり。11それ我ら生ける者の常にイエスのため死わたに付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。

「これは私のことを言っているんですよ」

と、皆さん、そう思ってください。「ああ、聖書にいいことが書いてあるな」なんて読んでダメです。そうではなく、

「これは私のことを言っている。私はこういう姿なんですよ」

と。これはまあ60歳を超えたら感じると思います。あまり若いときからこんなことを言うのと、「生意気だ」と言われる。だから、60歳を超えたら、皆さんは全部、有資格者です。光輝く高霊者、「光輝高霊者」です。後期高齢者というのは、光輝く高次の霊の人という定義を私は与えている。だから、そういう人はこのことを言えるんですよ。我らは常にイエスのために死にわたされている。それはイエスの生命がこの死の体に現れてくる。しかも、「それはあなたの方の中に現れる」と書いてある。

12さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。

今度は向こうへ、聞き手の方に転換している。こういう心意気を、皆さん、持って読んでいただきたい。だから、イエスは旧約聖書のことを

「聖書は我あかしにつきて証するものなり」

と言われた。今度は皆さん一人ひとりが、

「新約聖書は我あかしにつきて証するものなり」

と言わなくては。

「あなたはこういう人ですか？」

「はい、新約聖書に全部、私の本当の姿が書かれています。自分は口べたでうまいこと言えない。だから、私のことを知りたければ、新約聖書に精通してください。

そうしたら、私がかかってきますよ」

と。それだけのことを、皆さん、証あかししてくださいね。

「では、どうやって聖書を読んでいるの？」

「集会がありますから来なさい。奥田とかいう語り手がおる。その者はまだ26歳です」

と。私は60歳でいっぺんストップしたから、60からまた新しい年が始まっている。私はまだ26歳です（笑）。本当に僕は26歳に負けないですよ、気持ちにおいては。そういう、我々は一風変わった人であって、それが当たり前なんですよ。この世の人と同じだったら、どないするんですか。



「あの人はちよつとちがう。あの人の中にももの凄いエネルギーが満ち溢れている。とても86歳とは思えない。先生はいくつ?」

「はい、26歳です」

と(笑)。還暦でいつペン戻ったんだから、そこから新しくスタートする。そして次の還暦に向かつて行きます、120歳に。そういう心意気で、皆さん、生きてほしいんですよ。それがクリスチャンというものの特権なんです。この世の人は、この世の道だけで精一杯で、お薬をもらったりして、

「それでもやつぱりここが痛い、どうやらるか?」

なんてことを行っている。我々はそれを突き抜けて、

「わが国籍は天にあり」

と、胸を張っていく。そのことはキリストが告白させてくださる。自分ではない。

「もう自分は何度も死んでいるんです」

と言つてね。自分はもう常に十字架で死んでいる。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

と、ちゃんとガラテヤ書2章20節で言つてくれている。

「私が今生きているのは、私のために身代わりになって死んでくださったイエ

ス・キリスト、この方にすがって生きている」

と。でなかったら、イエスは無駄死むだじにされたことになる。クリスチャンというのは胸を張っているけれども、胸を張れる根拠は、キリストが私のために死んでくださったという、その厳粛なる事実の上に成り立っているんです。そしたらもう、誰も自分のために生きるなんて、そんなことは考えることができない。

「この恩人のために命を献げます」

と。これが大和魂だと僕は思う。それがちゃんとコリント書に書いてあるわけです。

12 さらにば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。……

14 これ主イエスを甦えらせ給いし者の我等をもイエスと共に甦えらせ、汝らと

共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。

もう共同体が出来上がっている。

「自分たちだけではない。あなた方と一緒になつて御国を受け継いでいくんですよ」ということをちゃんと言つてくれている。

15 凡てすべの事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵みめぐみの増し加わり、感謝い

や増りまて神の栄光の顕れん為なり。

だから、クリスチャンで感謝を忘れたらあかんです。何があつても、

「主さま感謝です」

という。その感謝、讚美を一番書いてくれているのが、僕は詩篇103篇だと思ふ。



●詩篇の中の最高は第103篇

こないだから詩篇をとりあげてきましたが、詩篇の中の最高のところはどこですかと言われると、僕は迷わず103篇だと答えます。詩篇103篇をまた、皆さん、どうぞ味わってください。あそこにはもう旧約と新約の福音が両方渾然一体として告白されている。

「あなた方の凡ての罪を赦し、すべての病を癒し、生命を滅びより贖い出す」とちゃんと言っています。たとえば、私奥田の自己紹介の時があつたとします。

「私は、自分は口べたで、しゃべれんけれども、『聖書は我につきて証するものなり』とある。私のことを本当に知りたかつたら、皆さん、新約聖書に精通してください。そうしたら、奥田がいかなる者か、全部書いてますから」

と、そうやって開き直りますよ。本当にそうでしょ。詩篇103篇を読みます。

「わが靈魂よエホバをほめまつれ

「エホバ」を「主」と読み換えましょうね。

わが靈魂よ主をほめまつれわが衷なるすべてのものよ

この「衷なるすべてのもの」を「五臓六腑」と小池先生は訳しておられる。

そのきよき名をほめまつれ わがたましひよ主を讃めまつれそのすべての恩恵をわするなけれ

「すべての恩恵」です。病気をしようが、何しようが、常に「恵み、恵み、恵み」なんです。

主はあなたのすべての不義をゆるし あなたのすべての疾をいやし

「彼の打たれし傷によりて我らは癒された」と、イザヤ書53章にも出てきます。

あなたの生命をほろびより贖いだし 仁慈と憐憫とをあなたに被らせ

この「仁慈と憐憫」といつたら、ヨハネ伝1章を思い出します。

あなたの口を嘉物にてあかしめたもう

これは聖霊のことです。「我を食らえ、我を飲め」と言われた。神の生命、キリストの生命であかしめたもう。

斯てあなたは壮きて驚のごとく新になるなり

若返らざるを得ないと書いてある。驚は翼を張つて昇つていく。

主はすべてを虐げらるる者のために公義と審判とをおこないたもう

おのれの途をモーセにしらしめ おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり

このあたりもヨハネ伝1章に出てきます。

主はあわれみと恩恵にみちて 怒りたもうことおそく 仁慈ゆたかにましま

せり

怒りたもうこと早かつたら、みんなすつ飛んでいますわ(笑)。

恒にせむることをせず 永遠にいかりを懐きたまわざるなり



「ありがとうございますと。キリストは、「七度の七十倍赦せ」と仰ったけれども、「もう永遠にお前のことは怒らない」と言っておられる。

10 主はわれらの罪の量にしたがいて我儕をあしらいたまわず われらの不義の
かさにしたがいて報いたまわざりき

振りかえれば、「何回でも地獄へ墮ちたりしているのが当たり前なのに、それがこうやって恩恵の中に生かされている。感謝です!」と、そういう思いです。そして次に、

11 主をおそるるものに主の賜うそのあわれみは大にして 天地よりも高きが
（うごし）

「天地の差があります」と、よく言いますね。それは、

12 そのわれらより憊をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし
凄いでしょ、廣大無辺でしょ。

13 主の己をおそるる者を

この「おそるる」は、「畏れかしこむ」という漢字を文語では当ててある。口語訳では「恐がる」方の漢字を書いてある。昔は、当用漢字に「畏」の字がなかったから。「こわがる」方の「恐」と、畏敬の念の「畏」というのは全然違うんです。だから、「恐」の漢字を当ててある口語訳聖書を全部直す必要があります。この「畏れ」という字を使う。私の友だちを「畏友」とよくいう、「畏友誰々さん」とか。

己を畏るる者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむが如し

でも、世の中には無茶苦茶な親がいっぱいおりますから（笑）、ちよつと一概にこう言えるとは限らないけれども。虐待するような親がいっぱいおります。でも、本当の父親ならば、そんなことはしないはずですから、「父がその子をあわれむがごとし」という。

14 主は我儕のつくられし状をしりわれらの塵なることを念い給えばなり

実は我々は塵である。吹けば飛ぶような塵なんです。土から出て土へ還る。本当に儂い存在なんです。そのことを主は知っておられるという。

15 人のよわいは草のごとくその栄は野の花のごとし 16 風すぐれば失せてあと
なく

ユダヤに吹く風は熱風ですから、熱風に吹き晒されたら、大概の作物は枯れてしまう。

その生いでし処にとえど尚しらざるなり

どこから生まれてどこへ行くのかわからない、そういう儂い存在だと。

17 然はあれど

だけれどもと、これは逆転なんです。

主の憐憫はとこしえより永遠まで主をおそるるものにとたり その公義は子孫
のまた子孫にいたらん

凄いでしょ。子々孫々までも主によって祝福されるといふ。



18 その契約をまもりその訓諭を心にとめて行うものぞその人なる
 そういふ人がその対象であると。

19 主はその宝座をもろもろの天にかたく置たまえりその政権はよろずのもの
 のうえにあり

これも天の次元での神さまの守り導きということ。だから今度は呼びかけて、イザヤ書にも、「天よ歌え、地よ叫べ。木々よ、叫んでくれ!」という箇所が出てきます。それと同じようなことが、103篇にも出てきます。

20 主につかうる使者よ主の聖言のこえをききその聖言をおこなう勇士よ主を
 ほめまつれ

21 その万軍よその聖旨をおこなう僕等よ主をほめまつれ

22 その造りたまえる万物よ主の政権の下なるすべての処にて主をほめよわ
 がたましひよエホバを讃めまつれ」(詩篇103・1〜22)

と、素晴らしいでしょ、この103篇は。これはもう本当に旧約と新約の福音をちゃんと繋いで、両者をガッチリ押さえてくれていると、そういうふうには私は思います。

だから、この103篇を、皆さん、大事にしてください。その他、詩篇には素晴らしいものがいっぱいあります。91篇もいいし、37篇も、73篇もいい。

●次は詩篇第37篇

37篇は、何が凄いかというと、この娑婆で働いてきた人にはよくわかることが書かれているんですよ。

「悪いやつが栄えている。悔しい!」
 と、我々は叫びがちです。

「あいつはゴマをすって、課長になって、部長になっている。俺はいつまでも係長だ」

という、悩みがちゃんと書いてあるんですよ。だから、そういう娑婆で苦しんでいる人にこの37篇を贈ってほしい。

「あんたは悔しいだろうけれども、神さまの見る目はちがうんだよ」

「証拠はあるの?」

「37篇にちゃんと書いてある。神の言葉はまちがいない。責任とつてくださるから大丈夫だよ」

と、そうやって励ましてやる。

「悪をなすものの故をもて心をなやめ不義をおこなう者にむかいて嫉をおこすなかれ」

「あいつゴマすって出世しやがって怪しからん、悔しい」なんて、そんなことないよと言っている。



2 かれらはやがて草のごとくかりとられ 青菜のごとく打萎るべければなり
さつき103篇でのべた、「風吹けば失せてあとなく」と同様なことが書いてある。

3 エホバによりたのみて善をおこなえこの国にとどまり真実をもて糧とせよ

4 エホバによりて歡喜をなせ エホバはなんじが心のねがいを汝にあたえたま
わん

5 なんじの途をエホバにゆだねよ彼によりたのまば之をなしとげ

6 光のごとくなんじの義をあきらかにし

「お前はただししい、間違っていない。ちゃんと神さまは見えておられる。大丈夫だよ。この世のやつらに何を言われても、ほっとけ」と、そういう心の余裕を与えてくれる。これをちやんと受けとつていけば、なにせ、語っておられる方が神さまですからね、万能の神さまがこれを語って約束しておられる。神の言葉というのは、約束ごとに偽りは無い。必ず成るんです。それがちゃんと、

6 光のごとくなんじの義をあきらかにし 午日のごとくなんじの訟をあきら
かにしたまわん

だから、忍耐が大事だよと。

7 なんじエホバのまえに口をつぐみ忍びてこれを俟望め

忍耐が必要なんです。「忍耐、忍耐、忍耐」と、ヘブル書なんかにも絶えず「忍耐」が出てきます。忍耐して待ち望めと。そして、

おのが途をあゆみて 栄ゆるものの故をもて あしき謀略をとぐる人の故をも
て心をなやむるなかれ

この世で成功した人はろくなことがありませんよ(笑)、ひがみかもしらんけれども。そういうことなんです、ちゃんとここに書いてあるでしょ。

8 怒をやめ 忿恚をすてよ心をなやむるなかれこれ悪を行う方にうつらん

そうやっていたら、悪を行う方にひきずられていくよと。あまり吠いてばかりおったらダメだよと。

9 そは悪をおこなうものは断滅され エホバを俟望むものは国をつぐべければ
なり

これが神の御意だよ。

10 あしきものは久しからずしてうせん

今栄えているかもしらんけれども、もうおらん、枯れていると。

なんじ細密にその処をおもいみるともあることなからん

一大搜索網で探しても居らんという。「あいつどこへ行ったんだらう?」と、ちゃんと書いてある。だけれども、

11 されど謙だるものは国をつぎまた平安のゆたかなるを楽しまん



そうでしょ、この37篇は。

¹²悪きものは義きものにさからわんとて謀略をめぐらし之にむかいて切齒す

¹³主はあしきものを笑いたまわん かれが日のきたるを見たまえばなり

「主は笑いたもう」というのはあまり出てこない、一か所か二か所くらい。今栄えているかと思うと、すぐ没落する。日産自動車の元会長のゴーンなんか知りませんよ、何十億もらおうと、そんなことはほつておけと〔註：カルロス・ゴーン。ブラジル出身の実業家。金融商品取引法違反および特別背任の疑いで起訴されたのち、保釈中に国外逃亡した〕。

「先生は何も持っていないから、えらそうなことを言っている」

「そうや、持っていない者のひがみや。悪いかね」

なんて(笑)。ちゃんとここに書いてあるんですよ、

「主は悪しき者を笑いたもう」

と。だいたいね、この世でまともなことをやって、大金持ちになるはずがない。どこかで変なことをやっている。脱税するとか、フィリッピンかどこかの国に預金口座を持っているとか、何かやっているはずですよ(笑)。と、僕は思っている。

¹⁴あしきものは剣をぬぎ弓をはりて苦しむものと貧しきものをたおし行

いなおきものを殺さんとせり

¹⁵されどその剣はおのが胸をさし その弓はおらるべし

その剣は逆に自分に向かっていく。正しい者に向けていた矢が、今度は引っくり返って自分の方にユーターンして返ってくる、と書いてある。

¹⁶義人のもてるものすくなきは多くの悪きものの豊かなるにまされり

私のことを言っている(笑)、持ち物が少ない。ゴーンなんかに負けるなよと言っているわけです。そんなふうを読むんですよ、聖書は。

¹⁷そは悪きものの臂はおらるれどエホバは義きものを扶持たまえばなり

エホバは完全もののもろもろの日をしりたもう

いや、私は「完全もの」ではありません。当たり前です、生まれたままの人間で全くはない。キリストが全部、私のマイナス(罪や咎など)をひつかぶって、私を全き者に生まれ変わらせてくださって、

「お前は生きよー!」

と書いて、ドーンとキリストは背中を押してくださった。そういうふう読んでいくんです。

「義しき者」ときたら、

「いえ、私は義しくありません」

とシヨボンとするのでなく、

「いや、キリストが義をくださった。生まれたままの私は義しくない。けれども、

キリストに在って生まれ変わった私は義人です」



と。これが「キリストを立てている」という姿なんです。だから、

18 エホバは完全もののもろもろの日をしりたもうかれらの嗣業はかぎりなく
久しからん

子々孫々までも栄えていくよという。

19 かれらは禍害にあうとき愧をおわず飢饉の日にもあくことを得ん
凄いい約束が書いてあるでしょ、37篇は。それから、もうちよつと先へ行きますと、「悪いやつは物を借りても返さない」とか書いてあって、23節が大事なところですよ。これをしっかり覚えてほしい。

23 人のあゆみは主によりて定めらるそのゆく途をエホバよろこびたまえり
この頃、「自己決定、自己決定」と盛んに言われる。法律学でも言うんです、「自己決定」と。私は自己決定なんてできません。そんな自己決定ができる強い人間ではありません。でも、キリストが私の代わりに決定してください。キリストが私の後見人です。私は無能力者です。
24 縦いその人たおるることありとも全くうちふせらるることなし エホバかれ
が手をたすけ支えたまえばなり

たとえその人がぶつ倒されることがあつても、全くペシヤンコになることはない。主は彼を助け支えたもうからである。我々は凄いい保険に入っている。保険料もキリストが払ってくださった。そういう、旧約の詩篇の中にもこんな素晴らしい句がある。そして、ちゃんと書いてある。

25 われむかし年わかして今おいたれど 義者のすてられ或はその裔の糧
こいありくを見しことなし

義者が棄てられ、その子孫が乞食をやっているのを見たことがないと書いてある。

26 ただしきものは終日めぐみありて貸しあうその裔はさいわいなり

27 悪をはなれて善をなせ然ばなんじの住居とこしえならん

28 エホバは公平をこのみその聖徒をすてたまわざればなり かれらは永遠にま

もりたすけらるれど悪きものすえは断滅さるべし

29 ただしきものは国をつぎその中にすまいてとこしえに及ばん

30 ただしきものの口は智慧をかたりその舌は公平をのぶ

31 かがれが神の法はそのところにありそのあゆみは一步だにすべることあらじ

霊法です、御霊の法があるという。いいことが書いてあるでしょ。それから、飛ばして37節に、

37 完人に目をそそぎ 直人をみよ 和平なる人には後あれど

38 罪をおかすものは共にほろぼされ 悪きもの後はかならず断るべければ
なり

穏やかな人には子孫がいる。でも罪を犯す者はもう子孫なんかいない。



39 ただしきものの救はエホバよりいづ エホバはかれらが辛苦のときの保岩なり

苦しみの時の砦なりと。詩篇46篇に、

「主は我らの避所また力なり、悩める時のいと近き助けなり」(詩篇46・1)

とある。

40 エホバはかれらを助けかれらを解脱ちたもうエホバはかれらを悪者よりと

きはなちて救いたもうかれらはエホバをその避所とすればなり」(詩篇37・1

〜40)

と。「避所」というのは逃げ込む所です。逃げ込んだら、力をいただくんです。そしてまた新しく出発する。それが我々です。

●詩篇第73篇も

これが37篇です。引っくり返したら73篇。だから、73篇もちよつと見てください。これもサラリーマンは身につまされるはずですよ。

「神はイスラエルにむかい心のきよきものに対してまことに恵あり
これは基本ですね。

2 然はあれどわれはわが足つまずくばかりわが歩すべるばかりにてありき
そうはいうものの——一応こういうことになっている。神さまはイスラエルに向かい心の清き者に対してまことに恵みをくださると、これは分かっている——しかしながら、現実を見よと。それはなぜかというと、

3 こはわれ悪きものの栄ゆるを見てその誇れる者をねたみしによる

悪い奴が栄えていて、怪しからん、悔しいと思う。その威張っているのが悔しいと書いてある。「その誇れる者を妬んだ」と。妬みはサタンですから。しかも、

4 かれらは死ぬるに苦しみなくそのちからは反りてかたし

5 かれらは人のごとく憂におらず人のごとく患難にあうことなし

私たちはいつも心配事をやっている。「明日何を食べようか、どうしようか」と。ところが、彼らは憂いにおらず、我々みたいに悩みにあうこともない。だから、彼らは傲慢で、

6 このゆえに傲慢は妝飾のごとくその頸をめぐり強暴はころものごとく彼等
をおおえり

つまり、したい放題だ。また、そういう者にチャラチャラ従っていく奴がいつぱいおる。

7 かれら肥えふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり

なんぼでもお金が入ってくる。そしてたら人々は全部くつついていく。

8 また嘲笑をなし悪をもて暴虐のことばをいだし高ぶりてものいう

9 その口を天におきその舌を地にあまねく往かしむ



10 このゆえにかれの民はここにかえり水のみちたる杯をしぼりいだして
11 いえらく神いかで知れたまわんや至上者に知識あらんやと

「神なんてどこにおるか!?」なんて偉そうなことを言っている。

12 視よかれらは悪きものなるに常にやすらかにしてその富ましくわれり

「悔しい!」と言っている。もしも、そういうことをつらつら言ったら、自分の子どもたち孫たちが躓いてしまう。困ったことだと書いてある。

15 われもし斯ることを述べんといひしならば我なんじが子輩の代をあやまらせしならん

一体なぜ、悪いやつが栄えて、神を求めている者がピーピー言っているのだろうか、そのことを神さま、教えてくださいますか、お願いしたい。思いめぐらしてもわからない。だんだん目が痛くなってきたと書いてある。

16 われこれらの道理をしらんとし思いめぐらししにわが眼いたく痛みたり

いつまでかと。神さまのところに来ました。主さま、教えてくださいと。神の聖所まで行った。そしたら、見せてくださった。「あいつらの最後はこれだよ」と、ビジョンとして見せてくださった。

17 われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思えるまでは然りき

18 誠にあなたはかれらを滑かなるところにおきかれらを滅亡に陥れ給う

19 かれらは瞬間にやぶれたるかな彼等は恐怖をもてことごとく滅びたり

これが彼らの最後だと。

20 主よなんじ目をさましてかれらが像をかるしめたまわんときは夢みし人の

目さめたるがごとし

そういう夢心地でありましたと。

21 わが心はうれえわが腎はさざれたり

内臓疾患にまでなっていました、思い乱れて。ああ私は愚かでした。

22 われおろかにして知覚なし聖前にありて獣にひとしかりき

獣のように悟りがなかった。

23 されど我つねにあなたとともにあり汝わが右手をたもちたまえり

24 あなたはその訓諭をもて我をみちびき後またわれをうけて栄光のうちに入れたまわん

だから、次が素晴らしい、

25 あなたの他に我たれをか天にもたん地にはあなたの他にわが慕うものなし

恋人が怒るんです、「私はどうなったの?」と(笑)。そこまでここで言っているでしょ、
「汝のほかにかたれをか天にもたん地には汝の他にわが慕うものなし」

と。そして、



26 わが身とわが心とはおとろうされど神はわがこころの磐わがとこしえの
嗣業なり

27 視よなんじに遠きものは滅びん 汝をはなれて姦淫をおこなう者はみななん
じ之をほろぼしたまいたり

28 神にちかづき奉るは我によきことなりわれは主エホバを避所としてそのも
ろもろの事跡をのべつたえん。(詩篇73・1~28)

こうしたことが書かれているのが73篇。37と73、これを結んでおいってくださいね。ここに書かれていることは、会社勤めとか、この世のことをやってこられた方は散々味わってこられたことです。ダビデの時代の3千年前にこんなことをちゃんと書いてくれているのは、不思議と思いませんか。もちろん、あの頃は会社なんてなかったでしょう。もう思えば思うほど不思議なんですよ。

「おお、不思議だ。素晴らしい。凄いな！」

という感嘆の思いで、皆さん、聖書をお読みにならないとね。これは教訓の書であるとか、そんなのではない。何かあなた方のことを見透かして、我々のために用意してくださいったという感じさえてしまう、そんな感想を持ちました。

●あなたは人ひとり救いましたか？

この世の人たちは、冒頭、京都大学の同窓会に集まった方々が67歳と言いましたが、私より19年若いから、一応今はこの世的には幸せなんでしょうけれども。そこで私は、

「あなたは人ひとり救いましたか？」

と聞いたが、誰もそんな人はいない。あなたはただ自分のためだけに生きてきたんでしょ。ちゃんとキリストは言っておられる。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん。死なば多くの果を結ぶべし」(ヨハネ12・24)

と。我々は「一粒の麦」と同様、旧き私は十字架につけられて死んでいるんです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

と。死なば、多くの御霊の子らを生み出していく。これが私たちの喜びなんですよね。もう自分は死んでいますから、十字架で。キリストが生きてくださっているから。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわ

がうちにありて生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)

と。これがクリスチャンの特権なんです。そういうふうには、胸を張って、私たちは天に向かつて歩んでいく。そういう者たちの歩み、これが「キリスト道」、つまり小池福音なんです。私はそれを受け継いで、小池・奥田そして今度は皆さん、というふうには、それこそ禱を繋いでいくという役割を持つていらつしやる。氣宇壮大なんですよ。



「キリストは宇宙的なキリストだ」

と、小池先生はいつも言っておられた。宇宙的なキリストです。普通の教会でそういうことを言われているかどうかは、私は知りません。教会を訪ねてないから。でも、私たちは宇宙的な気宇壮大なキリストをいただいて、宇宙のキリストの御手の中にあるんです。その中に懐いて^{いだ}いただいて、我々はどんな小さな石ころであっても、石ころの中に御霊が宿れば、光輝く。そういう存在にさせられる。それは自分が死んでないとダメです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」と、いつもそこに原点を置くんです。

「もう私ではありません。私は十字架で死んでいます。キリストが新しい生命をくださいました。キリストはいつも一緒に生きてくださる」

と。天界に行かれたキリストは行きつばなしだったら、しょうがないんですよ。でもおいでになる。降^{くだ}ってきてくださる、聖霊となつて一人ひとりの中に。そのことはちゃんとヨハネ伝で約束されている。

みんな、死ぬ間際に遺言を残すでしょ。その遺言がヨハネ伝の14章からなんです。キリストがこれから向こうへ行くから、あなた方に言い遺^{のこ}しておきたいといつて語られたのが14章からです。しかも、その前に13章がある。これも大事なんです。

「^{すまじし}「超越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、

よくキリストは、

「私の時はまだ来ていない」

と何度も言っておられる。いろんな方が、お母さんとか、マリヤさんが聞くでしょ。すると、「私の時はまだ来てない」と、いつもそう言っておられる。ところがここでいよいよ、

「自分が父のもとに行くべき時が来た」

ということをはつきり悟られた。それでどうなさったか。

世に在る己の者を愛して、^{きわみ}極まで之を愛し給えり。

泣けてくるよ、この言葉には。自分はどうとう召されていく。しかも十字架が待っているわけです。十字架を通して父の御許へ至るといふ、その時が来た。そして、この世に残していく弟子たちのことをとことん考えていらつしやる。

世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給えり。

と。その時早くも、サタンはイスカリオテのユダに裏切りの心を与えたと書いてある。

²夕餐^{ゆうげ}のとき、悪魔早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売

らんとする思^{おも}を入れたるが、³イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしこと

と、己の神より出でて神に到ることを知り、⁴夕餐より起^たちて上衣^{うわぎ}をぬぎ、⁵手中^{てぬぐい}をとりて腰にまとい、⁵尋^つで盥^{たいら}に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏^{まと}



いたる手中にて之を拭いはじめ給う。

ここに有名な「足を洗うキリスト」の姿が出てくる。

「先生である私がお前たちの足を洗った。ましてや、お前たちはお互いに足を洗いあつて、誰が偉いとかどうだとか、そんなことをやるんじゃないよ。互いに愛し合え」

と。それから34節に、弟子たちにあらかじめ言っておられるところですよ。

34 われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。35 互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん』(ヨハネ13：1～35)

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。あなた方が本当に愛し合っている姿、それは世の人に見える。キリストの姿は見えない。でも、あなた方が愛し合っている姿は見える。この愛し合っている姿でもって、見えないうキリストを——私は見えなくなるから——私を証せよ」
と、そこで言われた。

「人々はみな、あなた方が私の弟子だということがわかる。ということは逆に、あなた方がいがみ合っていたら、これは救いがないよ」

と。そういうことを思うと、東京キリスト召団が、先生が召されたあと、分裂しましたね。あのことは本当に私にとっては痛みでした。天界の先生もそうだと思います。ヨハネ伝に書いてあることと全然逆だったですからね。まあまあ、そんなことを言ってもしょうがない。今度は皆さんが新しいキリスト召団を、このキリスト直結を貫いて行つてくださる。そのことがここに書かれているわけですね。

「あなた方が本当に愛し合っているならば、それは人々の目にも見える。あなた方の見える、愛し合っている姿を通して、見えない私を証するんだよ」
と、そういうことがここで言われている。

●ヨハネ伝第14章から遺言

それから14章、ここから遺言です。

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』

我々は心騒ぎます。いろんなことにぶつかつたら。その時にこれを思い出してください。

「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

「はい、ありがとうございます。そのお言葉で充分です」

と、こうやって答えていく。

2 わが父の家には住処おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処を備えに往く。



「私はあなたの方のために所を備えに行く。それが終わったら、迎えに来るから。あなた方と常に一緒に居りたいんだ」と。「一緒に居りたいんや」と言ってくださっているんですよ。キリストは。居てくださるんですよ今、皆さん、本当にね。

もし往きて汝らの為に処を備え、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

と。相手と常に居りたいというのが愛ではないですか。愛する人と一緒に居りたいというのが愛の姿でしょ。キリストは、

「お前たちが大好きや。大好きなお前たちと一緒に居りたい」

と、そう言ってくださっている。これは私にはもの凄く有り難い言葉です。それから、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

という言葉が出てきます。

「何か願いがあるか？」

「お父さんを見せてくれ」

と言いましたよね。

8.ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』。イエス言い給う『ピ

リポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を

見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

「ピリポよ、長いこと一緒に居ったではないか。私を見た者は父を見たんだよ。それがわからないの？」ということを言われた。

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。

だから、イエスの言葉は常に、父がイエスと共に語っておられる言葉である。常に父子一体、天界の神さまが地上におられるキリストと一つになっておられる。こういう姿でキリストは居てくださる。

「神は霊なれば」

と。今日のタイトルは、『「見えるもの」と「見えないもの」』です。ここから本論になるんですけれども。モーセの十誡、それからイエスの言葉も、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべきなり」

と。神さまは見えない、形のないものです。人間は形あるものに縋りたいんです。

大仏さんを見てごらん、奈良のどっかい大仏さん。ああいう形を、お釈迦さんはきつと「造れ」なんて仰ってないと思う。けれども、人間は形あるものに縋りたい。それで、人間は造った。そして、「入魂」という儀式をやる。そしたら、単なる金属物ではなくて、生きるものに変わります。そして拝みだすんです。それが人間がやってきたことなんです。お地藏さんなんかもそうですよ。あちらこちらにあるでしょ。全部そうやって石で造ったお地藏さんでも、



入魂という儀式をやると、それが地藏菩薩に変わる。だから、それを拝むわけです。そこに見える形で見えないものが現れるという、そういう姿でつかまえていると私は思う。ところが、神さまは、

「刻んだ偶像を、何も造ってはいかん」

と、モーセの十誡でやかましく言っておられるでしょ。キリストも、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもって拝すべし」

と言われた。だから、

「形なきものを信ぜよ」

というのはもの凄い無茶苦茶な要求なんですよ。そう思いませんか？

法律の方でも、土地の売買をしますね。土地というのは見えているものです。でも、見えている土地は誰のものかという、つまり土地の支配者は誰かという、見えないわけです。でも、その支配を移すために、剣とか何とかそのシンボルを引き渡すことによって、支配が移ったということを表す。すべて見えないものを見える形で表すことをずっとやってきたんです、法律の世界でも。

だから、「水のバプテスマ」もそうじゃないかと思う。信者が

「信じました」

と言っても見えないでしょ。ザブンと水の中に漬けられる。それは死を表している。そして上がってくるのは復活を表している。あれは儀式なんです。その儀式を通して、見える儀式を通して、見えないものを表している。私たちは——そういう水のバプテスマは、小池先生はやってません——聖霊のバプテスマを受けます。

古代ユダヤの宗教家、洗礼者ヨハネがキリストのことを証した。ヨハネ伝1章18節までは哲学的なことが書いてあります。あとで触れます。そこから先のこと、洗礼者ヨハネがイエスのことを何と紹介してますか。イエスの特徴を二つ言っている。

「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」

「火と聖霊でバプテスマをなさる方」

この二つです。1章29節に、

「²⁹ 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。』」(ヨハネ1・29)

と。昔は、人間が罪を犯しますと、献げ物をするわけです。動物を屠って、自分の罪の贖いとして、動物にやってもらおう。その贖いをキリストは十字架にかかってただ一回切り、永遠の贖いを献げてくださった。だから、それは終わったと、ヘブル書に出てきます。

「永遠の贖いをただ一回きり、ご自分の体を通して成し遂げてくださった。も

はや、献げ物は要らない」(ヘブル9・26〜28)

とヘブル書に出てきます。



ところが、ヨハネ伝にちゃんと、イエスは洗礼者ヨハネの所に来られたと。

「**自分も洗礼を受けさせてほしい**」

と言って、来られるんですけれども、それに対して、洗礼者ヨハネは

「**視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊**」こひつじ

と言った。それから次に33節に、

「³³……『**これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる**』**といい給えり。**」

とちゃんと書いてあります。洗礼者ヨハネは二つの大事なことをここで言いました、「世の罪を除く神の羔羊」「聖霊のバプテスマをなさる方」と。「世の罪を除く」というのがスタートです。十字架で罪を贖わなければ聖霊は来ない。十字架で贖われたところには、放っておけば、サタンが入ってきます。それは困ります。だから、聖霊が来てくださって、その人をコントロールする、その人を神の子にする。だから、

「**世の罪を除く神の羔**」

「**聖霊でバプテスマを施す**」

という、この二つの大事なことをちゃんと1章のここで言っている。

ヨハネ伝1章の1節から18節は——私は昨日ここを読んでいて感じた——長年クリスチャンとしてやってきた人間が振り返ってみて、

「ああ、この通りでした。主さま、本当にこの通りでした。よくわかります」

という、そういう答えを私はした。しかし、スタートラインの人がこんなのを読んで、分かるはずがないんです。

「はじめ**太初に言あり**、

なんて、何のことか?と。

「**言は神と偕にあり、言は神なりき。**」(ヨハネ1:1)

なんて、ピンとこない。でも、長年86歳まで——私が信仰に導かれたのは24歳からですから60年間やってきたわけですから——それをやってきて、振り返ってここを読んだら、

「ああ、まことにその通り、本当にその通りでした。アーメン、アーメン!」

というのがひとりで出てくる。そういうふうな感じ方を、今回初めてKKRのホテルで聖書を読んでいて、思ったんです。スタートラインのクリスチャンがこんなのを讀んだって分かるはずがありません。でも、何十年もやってきて振り返って、

「本当にその通りでした。イエスさま、あなたはこういうお方だったんですね。初めに神と共にいらっしやったお方、霊なるキリスト、ロゴス・キリスト、それが受肉して、あのナザレのイエスになってくださった。そして、私たちの罪を贖って、そしてまた天に昇っていかれて、聖霊の姿でまた来てくださる。そういう全キリストがここに集約されている。有り難うございました!」



という、そういう聖書の読み方です。だから、クリスチャンとしての歩みというのはエンドレス(終りなし)ですね。年をとればとるほど有り難みが増してくる。

「ああ、素晴らしい!」

という讚美の心が湧いてくる。だから、光輝く高次の霊、「光輝高霊者」の實質が与えられていくんですよ、皆さん。それがさっきの詩篇103篇でもあるし、このヨハネの1章でもあるし、全部そうやって、晩年になればなるほど、聖書は光輝いてくる。そして、

「聖書は我につきて証するものなり。私の身分証明書です」
と、胸を張って言えるんです。

こんなお話を聞かれたことはないと思うんですよ、今まで、どなたさまからも。若い時は、こんなことはしゃべりませんよね。この年になつてから初めてそういうことが言えるわけです。だから、人間が年をとるということは悪いことではありませんよ(笑)、本当に。年をとればとるほど輝いていく。御国が近いから、向こうからの吸引力が凄いから、

「あばよ! バイバイ!」

とか言つて、輝いて天に昇っていきますからね。天に昇っていった人がいますよ、旧約の預言者エリヤ、エリシヤ。二人は天に昇つて行つた。エノクも、

「見えすなりき」

とあります。ですから、三人の凄い預言者がいました。

その凄い預言者が顕れてきたのはどこですか、福音書の中で。キリストが山で変貌された。あの時、エリヤとモーセが顕れてきた。そして、

「イエスがどんな死に方をするか相談していた」

と、書いてあるでしょ。だから、福音書というのは凄いわ、本当に。ところが、山を下りてきた弟子たちは、

「誰がえらいか?」

なんてやつている。もう月とスッポンですわ、あの頼りない弟子たちは。しかし、キリストは頼りない弟子たちを選ばれた。色が付いてなかったから。漁師たちでしょ。宗教的な色が染まっている人はダメなんです。色の付いてないお魚採りを召し出して、頼りないけれども、やがてお前たちはまつとうな者になる。そして、実際まつとうな者になったのが、変貌のペテロです。小池先生がよく、

「躓きのペテロから御霊のペテロに変貌した」

ということを仰るでしょ。ペテロにしてもヨハネにしてもヤコブにしてもみんなお魚採りだった。ずぶの素人だった。それをキリストは選ばれた。

だから、我々みんなだつて胸を張つていいんですよ、ずぶの素人ですが。誰も神学校なんか行かなかつた。私もどこにも行つてない、ずぶの素人です。法律学の方をやつてきたというだけのこと。でも、小池学校で勉強しているうちに、いつのまにか、そこの牧



師に絶対に負けられないと思うようになりました。現に日本キリスト教団の、私と同一年の牧師さんが、私を

「牧師さんを導く先生だ」

と公言している。ずぶの素人がプロの牧師からそう言われているわけですから。それは私には何の根拠もないことなんです。キリストが私をそうやって光輝く高次の霊の人に変貌させてくださったからなんです。

だから、クリスマスチャンも晩年になればなるほど輝いていなくなったら、ダメですよ。自分のヘソばかり見てたらあかん（笑）。「上を向いて歩こう」の坂本九ちゃんです。ただし、躓かないように、転ばないでねと。そういうようにメチャ明るいは晩年のクリスマスチャンの晩年ですよ。その姿を、皆さん、証してほしい。老人ホームに行かれても、どこへ行かれても、皆さん、うつむいていたらあかん。

「上を向いて、明るくいきましょう」

と、皆さん、やってくださいよね。それが私たち老年パワーではないですか。

●老年パワー炸裂する

老年パワーというと、これまたクリスマス話ですけれども、聖書に登場する人はみんな老年ですよ。エリサベツ、ザカリヤも老人でしょ。シメオン老人、この人もキリストに遭うことだけを生き甲斐にして生きてきた。それから、84歳の女性の預言者アンナがいました。ルカ伝に出てきます。アンナも幼児わがやいのイエスに遭うことだけをめぐして暮らしてきたと書いてあるでしょ。ルカ伝の始めのところを見たら、全部書いてあります。ザカリヤ、エリサベツそしてシメオン老人のことがそうです。要するに、齢よわいいくばくもないような、そういう枯れ木のような人が活躍している。これを僕は

「老年パワー炸裂する」

というタイトルを付けて、とりあげたい。その中でひとり乙女マリヤが輝いている。羊飼いは老人だったのか、少年たちだったのかわからない。どちらにしても、アルバイトです、貧しい人たちです。

だから、クリスマスというのは、あの栄光の座におられたイエスというお方が栄光の座を捨てて、本当に地上におりてきて、しかも一番惨めな馬槽まぶねの中に生まれたことをお祝いすることなんです。どん底の生まれ方をしてくださった。そういう方を我々は讃たたえるわけです。現場を見た人は誰もいません。

ノーベル賞授賞式にはマスコミが寄ってきます。ほんまはキリストが生まれた時に寄ってこなければあかんわけですよ（笑）。マスコミは誰も知らない。だから、本当のことは分からないはずなんです。キリストがどういう生まれ方をなさったか、分からないはず。生まれたことを書いてある記事は、マタイ伝とルカ伝にしかない。マルコ伝には書いてない。



もう伝道から始まっている。ヨハネ伝には書いてない。そうすると結局、キリストが生まれたことはマタイ伝とルカ伝によることになる。マタイ伝には、ちょうどヨセフが離縁しようと思ったら、夢で天使が離縁してはいかんということを言ってなだめたと、その程度のことしか書いてない。一番詳しく書いているのはルカ伝です。天使ガブリエルがマリヤに、「めでたし、恵まれたる者よ、主はあなたと共におられます」と告げる。その前にザカリヤの所に頭れて、

「お前はおしになれ！」

「何ですか？」

「そんな口を、くだらんことを聞くなら、お前は黙っておれ！」

と言って、おしにさせられた。ところが、マリヤさんは、

「どうしてそんなことがあるんでしょうか？」

と聞いたら、あのガブリエルという天使は優しいんです。天使の対応は明らかに差別ですよ(笑)、今でいえば。そうでしょ。二人はどつちも、「何ですか？」と聞いている。

「こんな年寄りに、ヨハネが生まれるということがあるんですか？」

「お前は黙っておれ。おしになれ！」

と。そして、乙女マリヤが身ごもると聞いて、

「そんなことがあるんでしょうか？ 私はまだ男の人を知らないんです」

と聞くと、ガブリエルは本当に優しく対応する。そしたら、マリヤさんは、

「はい、わかりました」

と。でも、このことは大変なことですよ。乙女が身ごもるなんて前代未聞みもんですよ。

「不義の女、貫通の女は、石打ちにして叩き殺せ」

というのがモーセの律法ですよ。マリヤさんは穏やかでないですよ。そんな、

「神のお告げがありました」

なんて誰も信じないわね、

「証拠があるか!?!」

と。不義密通のやからは、モーセの律法だったら石打ちですよ、婚約中にそんな不義密通をやったら。だから、マリヤさんは高齢で身ごもった親類のエリサベツの所へ行っただけです。そしたら、エリサベツのお腹のヨハネは——もう六か月になっていた——躍ったと書いてある。そして、「マリヤの讃歌」がそこに出てくるわけです。聖書にはああいう素晴らしい記事がある。

ああいうクリスマスの情景を、皆さん、思いおこしてください。やっぱり讃美歌にもありますように、イエスは人知れず生まれてくださった。誰も知らない。静かに夜露が降ることく、神の恵みがイエスという方において結晶した。その方を私たちは救い主として尊び、喜んでいいる。これがクリスマスなんです。



「偶像なんか造ってはいかん。神は霊なれば拝する者は霊と真をもつて拝すべし」と、キリストも言っておられる。

「見えない神を信ずる」

なんて、本当に難しい。そういう我々に対して、

「そうだね、見える者が欲しいよね」

といって、神はナザレのイエスをくださった。

「この人を見よ」

です。このナザレのイエス、この方にはマリヤさんからの流れ、これは人間の系統ですが、あります。それから、聖霊によって身ごもったという、神の方から来ている流れがあります。だから、神さまから来た部分と、それからマリヤさんという人から来た部分、この両方が備わっているから、我々人間の思いも分かってくたさる。初めから天からのものだけだったら、人のことは分からない。ちゃんとマリヤさんを通して、人間の部分もある。そして、聖霊によって身ごもっているから、神さまとつうつうの関係です。だから、本当に有り難いことだと思う。イエス・キリストが怪物だったらしょうがないんですよ。キリストがどんな御業をなさっても、

「あれは私とは関係ないんだ」

と、それでお終りでしょ。ところが、ちゃんとマリヤさんの流れで、人間としての心を持っておられる。悲しみも持っておられる。それから、聖霊という神さまとも繋がっている。この両方が、人間の面と神の面が、両方混在している。だから、私たちの悩み苦しみも全部分かってるし。神さまのなさることが素晴らしいことも分っている。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべし」

という。

「しかし、形が欲しいんです」

「よっしゃ、分った。イエス・キリスト、これが形だ。この人において神を見よ」

と。これは恵みでしょ。

「イエス・キリストにおいて神を見なさい」

と。小池先生は、

「イエス・キリストにおいて神を見ない人は、神さまをどこ探しても見つかりませ

んよ」

と言われた。しかも、

「イエス・キリストの前に降参しなさい」

と。偉そうに「信じてやってもいい」なんて、そんなものはダメ。イエスの前に降参しなさい。そうしたら、イエスはご自分を明かしてくたさる。だから、

「見えない神に見える姿で表してくたさっている」



ということが、恵みに増し加えられた恵みです。そういうふうに見れば本当に、
 「神は霊なれば、拝する者は霊と真をもって拝すべし」
 と言われるが、見えないお方を信ずるのは難しいから、

「では、イエスというお方をあなたの方にプレゼントするよ。このお方において神を見なさい。このお方にて人らしい人を見なさい」

と。それがあの讚美歌121番、由木康〔1896～1985〕さんの「この人を見よ」という讚美歌です。これは日本人の作った唯一の讚美歌といわれている。

- 1 馬槽まぶねのなかに うぶごえあげ、
木工たくみの家に ひととなりて、
貧しきうれい、 生くるなやみ、
つぶさになめし この人を見よ。
- 2 食するひまも うちわすれて、
しいたげられし ひとをたずね、
友なきものの 友となりて、
こころくだしし この人を見よ。
- 3 すべてのものを あたえしすえ、
死のほかなにも むくいられで、
十字架のうえに あげられつつ、
敵をゆるしし この人を見よ。
- 4 この人を見よ、 この人にぞ、
こよなき愛は あらわれたる、
この人を見よ、 この人こそ、
人となりたる 活ける神なれ。

●ルカ伝第一章（ザカリヤ・エリサベツ・マリヤ）

では、もう一度、ルカ伝にちよつと戻つてくださいますか。ルカ伝1章5節から、

「⁵ユダヤの王ヘロデの時、アビヤの組の祭司に、ザカリヤという人あり。その妻はアロンの裔すえにて、名をエリサベツという。⁶二人ながら神の前に正しくして、主の誠命いましめと定規さだめとを、みな欠なく行えり。⁷エリサベツ石女うますめなれば、彼らに子なし、また二人とも年邁すすみぬ。

⁸さてザカリヤその組の順番まわりに当たりて、神の前に祭司の務つとめを行うとき、⁹祭司の慣例ならわしにしたがいて、籤くじをひき主の聖所に入りて、香かうを焼くこととなりぬ。¹⁰香を焼くとき、民の群みな外にありて祈りいたり。¹¹時に主の使つかいあらわれて、香壇かうだんの右に立ちたれば、¹²ザカリヤ之を見て、心さわぎ懼おそれを生ず。



13 御使みつつかいいう『ザカリヤよ、懼るな、汝ねがいの願ねがは聴きかれたり。汝ねがいの妻つまエリサベツ男子なんしを生なまん、汝ねがいその名なをヨハネと名なづくべし。14 なんじに喜よろこ悦びと歡たの樂しみとあらん、又またおおくの人もその生なるるを喜よろこぶべし。15 この子こ、主しゅの前に大おほならん、また葡萄酒ぶどう酒と濃こき酒さけとを飲のまず、母ははの胎はらを出いづるや聖せい靈れいにて満みたされん。16 また多くのイスラエルの子こらを、主しゅなる彼からの神かみに帰かえらしめ、17 且かつエリヤの靈たまと能力ちからとをもて、主しゅの前に往ゆかん。これ父ちちの心こころを子こに、戻もどれる者ものを義よ人の聰さと明めいに帰かえらせて、整ととのえたる民たみを主しゅのために備そなえんとてなり』18 ザカリヤ御使みつつかいにいう『何なにに抛なりてか此この事ことあるを知らん。我われは老人としよりにて、妻つまもまた年とし邁すすみたり』

この御使みつつかいガブリエルさんは偉おそろそうにしている。

21 民たみはザカリヤを俟まちちいて、其そのの聖せい所じよの内うちに久ひさしく留とどるを怪あやしむ。22 遂いに出いで来きたりたれど語かたること能あたわねば、彼からその聖せい所じよの内うちにて異い象しやうを見みたることを悟さとる。ザカリヤは、ただ首くびにて示しすのみ、なお唾おとしなりき。23 かくて務つとめの日ひ満みちたれば、家いへに帰かえりぬ。

24 此この後のちその妻つまエリサベツ孕みりて、五月ごほど隠かくれおりて言う、25 『主しゅわが恥ちを人ひとの中に雪ゆきがせんとて、我われを顧かえみ給たまうときは、斯かく為なし給たまうなり』

当時のイスラエルの女性にょせいは、子どもを産うむのが誇こほりというか、一人前ひとりまへで、子どもを産うまなものは「石女いしめ」といつて、使つかいものにならんというわけで、恥ちずかしいことだったんです、屈辱くつじやくなんです。エリサベツはその恥ちを雪ゆきいでくださったと喜よろこんでいる。しかもこんな老年らうねんになつて。それから六か月ろっかげつたつて、今度はマリヤさんの所にガブリエルが現あられた。

26 その六月ろっごくめに、御使みつつかいガブリエル、ナザレというガリラヤの町まちにおる処女おとめのものものとに、神かみより遣つかはさる。27 この処女おとめはダビデの家いへのヨセフという人ひとと許い嫁よめせし者ものにて、其そのの名なをマリヤと云いう。28 御使みつつかい、処女おとめの許いにきたりて言う『めでたし、恵あはれまゐる者ものよ、主しゅなんじと偕しよに在いませり』29 マリヤこの言ことばによりて心こころいたく騒さわぎ、斯かかる挨拶あいさつは如何いかなる事ことぞと思おもひ廻めぐらしたるに、30 御使みつつかいいう『マリヤよ、懼おそるな、汝ねがいは神かみの御前みまへに恵めぐみを得えたり。31 視みよ、なんじ孕みりて男子なんしを生なまん、其そのの名なをイエスと名なづくべし。32 彼かは大おほならん、至高いとたか者ものの子こと称とえられん。また主しゅたる神かみ、これに其そのの父ちちダビデの座くら位いをあたえ給たまえば、33 ヤコブの家いへを永とこ遠しよに治さめん。その国くには終おひつることなかるべし』

長いお告つげですね、凄あはいことを言いっている。

34 マリヤ御使みつつかいに言う『われ未いまだ人ひとを知らぬに、如何いかにして此この事ことのあるべき』



マリヤは正直に、「はい、私はまだ男の人を知らないんです」と。「知る」というのは肉体的な結合を表している言葉です。

「あなたは子どもを産むという素晴らしい預言をくださったっているけれども、そんなことが私にどうしてあるんでしょうね?」

と素直に自分の気持ちを表した。「黙れ!」とは言わなかった、この御使は。これ差別でしょ。ザカリヤに対しては「お前は黙っておれ!」と、えらそうにしているくせに、「ああ、マリヤさん、マリヤさん」と、優しい対応です。

35 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使はなれ去りぬ。

さあ、マリヤさんはそうは言ってみたものの、だんだんお腹が大きくなってきたら、どうなりますかね。これはもう不義密通の子といわれる。「ヨセフは離縁しようとした」とマタイ伝に書いてます。また、御使は「離縁してはならん」となだめたと書いています。ルカ

39 その頃マリヤ立ちて山里に急ぎ行き、ユダの町にいたり、40 ザカリヤの家に入りてエリサベツに挨拶せしに、41 エリサベツその挨拶を聞かや、兒は胎内に躍り。エリサベツ聖霊にて満たされ、42 声高らかに呼ばわりて言う『おんなの中に汝は祝福せられ、その胎の実もまた祝福せられたり。43 わが主の母われに来る、われ何によりてか之を得し。44 視よ、なんじの挨拶の声、わが耳に入るや、我が兒、胎内にて喜びおどれり。45 信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給うことは必ず成就すべければなり』

そこでマリヤはここで主を讚美する歌をうたいます。これが「マリヤの讚歌」という非常に有名な歌です。

46 マリヤ言う、『わがこころ主をあがめ、

47 わが霊はわが救主なる神を喜びまつる。

48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。

視よ、今よりのち万世の人われを幸福とせん。

49 全能者われに大なる事を為したまえばなり。その御名は聖なり、

50 そのあわれみは代々かしこみ恐るる者に臨むなり。

51 神は御腕にて権力をあらわし、心の念に高ぶる者を散らし、

52 権勢ある者を座位より下し、いやしき者を高うし、



53 飢えたる者を善き物に飽かせ、富める者を空しく去らせ給う。
 54 また我らの先祖に告げ給いし如く、
 55 アブラハムとその裔すえとに対するあわれみを永遠とこしえに忘れじとて、
 僕イスラエルを助けたまえり』

これが聖霊に導かれたマリヤの讃歌です。

56 かくてマリヤは、三月ばかりエルザベツと偕ともに居りて、己が家に帰れり。

そして今度は、エリサベツがいよいよお産のときがきた。男の子が生まれました。

57 さてエリサベツ産む期しきみちて男子なんしを生みたれば、58 その最寄もよりのもの親族の者ども、主の大なる憐憫あわれみをエリサベツに垂たれ給いしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。59 八日めになりて、其の子に割礼を行わんとて人々きたり、父の名ちなに因みてザカリヤと名づけんとせしに、60 母こたえて言う『否、ヨハネと名づくべし』61 かれら言う『なんじの親族の中には此の名をつけたる者なし』62 而して父に首にて示し、いかに名づけんと思ふか、問いたるに、63 ザカリヤ書板かきいたを求めて『その名はヨハネなり』と書きしかば、みな怪しむ。

64 ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いいて神を讃ほめたり。65 最寄に住む者みな懼おそれをいただき、又すべて此等あまねのこと徧あまねくユダヤの山里に言い囃はやされたれば、66 聞く者みな之を心にとめて言う『この子は如何なる者にか成らん』主の手かれと偕ともに在りしなり。67 かくて父ザカリヤ聖霊にて満たされ預言して言う、

68 『讃むべきかな、主イスラエルの神、その民をかえりみて贖罪あがなをなし、

69 我らのために救すくいの角を、その僕ダビデの家いしに立て給えり。

70 これぞ古いにしえより聖預言者の口をもて言い給いし如く、

71 我らを仇あだより、凡すべて我らを憎む者の手より、取り出したもう救なる。

当時は民族争いが大変ですね。土地を奪つたり奪われたりとか、もうそういうことで、周
 囲は敵あばかりという中にあるわけです。

72 我らの先祖に憐憫あわれみを垂たれ、その聖なる契約おぼを思し、

73 我らの先祖アブラハムあに立て給いし御誓みちかいを忘れずして、

74 我らを仇あだの手より救い、生涯、主の御前に、

75 聖と義とをもて懼おそれなく事つかえしめたもうなり。

「聖と義をもつて事つかえる」という。

76 幼おひな兒よ、なんじは至高いしたか者の預言者と称えられん。これ主の御前に先だちゆ

きて、其の道を備え、

77 主の民に罪の赦ゆるしによる救を知らしむればなり。

78 これ我らの神の深き憐憫あわれみによるなり。この憐憫によりて朝あしたのひかり、上よ



り臨み、⁷⁹暗黒と死の蔭かげとに坐する者をてらし、我らの足を平和の路にみちびかん」

凄^くい預言をしましたね。この預言の中で、「暗黒と死の蔭かげとに坐する者」とある。これは我々異邦人のことですよ。我々異邦人は、キリストというお方に会おうまでは、実に「暗黒と死の蔭かげとに坐する者」でした。それがキリストによつてこの罪と死の呪いから贖い出してもらつて、生命の世界に躍り込ませていただいた。

⁸⁰かくて幼児は漸やに成長し、その霊強くなり、イスラエルに現るる日まで荒野あらのにいたり。」(ルカ1・5〜80)

●ルカ伝第2章(シメオン・アンナ)

それからルカ伝2章へいきますと、今度はシメオン老人のことが出てきます。イエスが生まれた時に、羊飼いたちが神を讚美したということが書いてあります。それから、旧約聖書にはちゃんと律法があつて、生まれて八日たつたら必ず割礼を施すこと、名前をつけることが書かれています。そこで八日経つたので、「イエスと名づくべし」という預言の通り、名をイエスと名づけた。「潔めの日」というのが産後33日間あつて、女性は子どもを産んだからまだ汚れているということになっていましたから、産後33日間おとなしくしている。それが終わつたら、今度は宮参りということになるわけです。イエスを抱いて、ベツレヘムからエルサレムへ上つていく。田舎から都へ行つたという感じですね。それには必ず献げ物をしなさいということが決められているから、貧乏な人の場合は「山鳩一つがい或は家鳩の雛二羽」、それを献げ物にしようと言つてきた。その時、ここからが老人パワー炸裂なんです。

「²⁵視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。」

ここでまた聖霊の働きが非常に顕著です。

²⁶また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此とき御霊みたまに感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法おきての慣例ならわしに遵したがいて行わんとて来りたれば、²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讚めて言う、

「主さま、今こそ僕は安らかに御許しよへに参ります。このお方に会おうまでは地上に残しておくというお約束でした。今、それが叶えられました。どうぞ、天にお召しください。私は喜んで御許しよへに参ります」と。そのことがここに書いてある。

²⁹『主よ、今こそ御言みことばに循したがいて、僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。』³⁰わが目は、はや主の救を見たり。³¹是もろもろの民の前に備え給ひし者、

だから、イスラエルだけではないんです。



32 異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり」

と書いてある。これが嬉しいんですよ。イスラエルだけであつたら、我々は置いてきぼりをくらう。ところが、「異邦人をてらす光」そして「御民イスラエルの栄光」という。そして、両親はシメオンを「不思議なことを仰るご老人」と思っているわけだ。

33 かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、34 シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、

この聖句は躓きの石なんです。だから、この石にぶつかつたら碎けて倒れる人もいる。この石を避所、抛り所としてこの石に継る人は立てられる。そういう二つの役割を果たす。それが「或は倒れ、或は起たん為に」ということ。しかも、このお方は、

また言い逆いを受くる徴のために置かる。

つまり、十字架を負いたもう、殺されるという預言です。十字架で殺される。若いマリヤさんに対して、

「めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり」

というあの嬉しい御使のお告げと、ここで宮参りの時のシメオン老人の言っていることはまるで逆じゃないですか。救い主としての運命を背負って生まれた方が十字架を担って十字架の上で死ぬ。ということは、お母さんのハートが剣で差し貫かれることを意味します。そうでしょ。わが子が十字架で殺されたら、母親はそれ以上に辛いはずです。

35 —— 剣なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顕れん為なり」

これによつて人々の中の本当の思いが表れてくる。神を慕う人たちと、神に逆らう人たちの黒白がはっきりする。それまで曖昧模糊としていた人がはっきりと光と闇に、生命と死に分かれてしまう。小池先生は、

「信ずるか信じないか、ではありませんよ。魂が碎けるか碎けないかですよ」

と言われた。小池先生の神学は「碎けの神学」なんです。東京神学大学教授の北森嘉蔵さんの神学は「神の痛みの神学」と言われている。キリストは十字架で痛んでおられるという。小池先生は、

「痛みつばなしでは、私はやりきれん。そこで、十字架で碎かれたキリストは復活して天に昇って、聖霊となつて我々の中に宿りたもう。即ちキリストは碎け・突破

破そして聖霊降臨という道を開いてくださったお方だ」

と言う。だから、「碎けの神学」ということを言われた。ドイツに赴任していた時に「突破の神学」ということも言われました〔註：1962年2月18日、ハンブルク大学において公開講演「日本のプロテスタンティズムと突破の神学基礎論」と題して行われた〕。

そういうことで、シメオン老人はここで役割を果たしました。それで、もう御許へ参り



ますと。もう一人いた、パヌエルの娘のアンナという預言者がいた。

³⁶ここにアセルの族^{やから}。パヌエルの娘に、アンナという預言者あり、年いたく老ゆ。
処女^{おとめ}のとき、夫に適^ゆきて七年ともに居り、³⁷八十四年寡婦^{やもめ}たり。宮を離れず、
夜も昼も断食と祈祷とを為^なして神に事^{つか}う。

これまた老人。パワー炸裂ですよ。年齢はいくつですかね、凄いでしょ。

³⁸この時すすみ寄りて神に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖^{あがな}を待ちのぞむ人
に、^{おさない}幼児のことを語れり。

³⁹さて主の律法^{おきて}に遵^{したが}いて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに帰り、己が

町ナザレに到れり。」(ルカ2・25〜39)

そういう話です。ですから、ルカ伝のこの箇所を読んだら、本当に「老人パワー炸裂」というタイトルを掲げたくなくなります。

「見よ、年寄りたち、あなたたちは輝いているよ!」

と。光輝く高次の霊の人たち、光輝高霊者。光輝いて老人。パワー炸裂。それは聖霊のなせるわざです。そういう老人。パワー炸裂の中で、一人マリヤさんという美わしい方がいらつしやる。なんとロマンチックなことか、というのが私の読み方です。でも、

「マリヤさん、あなたのハートは剣で差し貫かれますよ」

と。「めでたい、めでたい」だけではない。辛いですね、母親として。やっと授かった子どもさんがそうやって十字架を背負って歩む。私のハートは剣で差し貫かれるという、この厳しい定め、それをマリヤさんはずっと耐え抜いてきた。だから、十字架から下ろされたキリストを膝に抱いたマリヤさんの姿がありますね。「ピエタ」というんですかね、あれなんか本当にマリヤさんのお気持ちというのとはどんなであったろうかと思う。

だから、カトリックの方がマリヤさんを慕うというのはよくわかるんです。でも、マリヤを偶像にははいかん。なにかカトリックにとつては、マリヤさんの方がキリストより上みたいな感じになっっているように思う。キリストが十字架にかかっている像だけがあった、そこにマリヤさんが立っているでしょ。

カトリックのことを詳しく知りませんが、ミサや何かをやっても、あまり聖書のお話はなさらないみたいですね。なにか儀式的なことが多いみたいに感じます。あれだったら、

「聖書を本気で読んでいるのかしら?」

と思う。カトリックの方々にいっぺん、皆さん、お聞きになってくださいね。私の知っているカトリックの方はあまり読んでないみたいです。その方に聞くと、

「儀式にはあずかっています」

と言う。

「儀式でありがたいんですか?」



「さあね……」

なんて（笑）。それでは勿体ないですよ。カトリックは大きな組織ですから、世界中どこにもあるんですから。それがもつともつとキリストをポピュラーに庶民の中に宣伝してもらわないと。カトリックが素人に伝道を禁じているのは、

「間違ったことを伝えてはいかん。プロに任せろ」ということだと思う。

「カトリック信徒として忠実につとめなさい」と、このことはやるんです。けれども、

「キリストを伝えるのはプロである我々に任せてくれ」

と、なにかそんな感じを受ける。だから、カトリックの普通の一般信徒はそんなに伝道に熱心ではないように思う。ミサとかそういうものには熱心に通うけれども、

「伝道はプロに任せて、素人が変なことを言つて間違つたことを言つてはいかん」

という抑制が働いているのかなという感じがします。我々は石ころですけれども、聖霊が宿り給うことによつて、私たちはキリストを伝えていくという使命ができてきます。つまり、パウロと同じ路線で行こうというわけです。まあそんなことを感じます。

● イエスにおいて見えない神を見る

いろんなことをお話したと思いますが、まとめますと、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべし。偶像を造つてはならん。見えない神を信じなさい」

と。見えない神を信ずるのは難しい。その願いに応えて——偶像を造らなくていい——

「イエス・キリスト、この見えるナザレのイエスにおいて神を見なさい」

と。それがさきほど取りあげた121番の讚美歌なんです。そういう形で我々人間の願いに応じた父なる神さまは、本当に恵み深いと思います。

「見えない神を信ずるなんて無理ですわ。何か見えるものをくださいいね」

「わかった。ナザレのイエス、これだよ。このお方において神を見なさい。このお方に縋つた者は救われる。このお方を蹴飛ばしたやつは自分で地獄へ行く」

と。それが、

「十字架の言は^{ことば}亡ぶる者には^{おろか}愚なれど、救わるる我らには^{ちから}神の能力なり。」（コ

リント前1・18）

という御言葉に示されています。そういう大事なところはちゃんと両方をガッチリつかないでつかまえておく、そういうつかまえ方をどうぞなさってください。

聖書は有機体なんです。たとえば、歯が痛い時に全身が痛いような感じがするでしょ。頭が痛いとき全身が痛いように思うでしょ。そういうように、聖書の所々は単独ではありえ



ない。みな繋がっているんです。そういう形でグツとつかんでいく。そして、キリストを讃える。皆さんはもう長年、聖書に慣れ親しんでいるプロですから。そのぐらいの自覚を持つてくださいね。私は京都召団の集会でも言っているんです。多くの本を読まなくていい。でも、聖書には習熟してほしいと。

「あの御言葉は何章何節に出ています。このエピソードはどこどこに出ています。私は聖書に色を塗っていますからすぐ分かります」

と。聖書と皆さんが一体。聖書と自分とは本当に一つですと。そういうふうになってほしい。このことを私は呼びかけている。どこまでやってきてくれるか、そこまでは分かりませんよ。でも、私はそう思う。たくさんの本を読む必要はない。東京キリスト召団の集会なら、いつも小池先生のテープとかビデオとかをご覧になってやっていらつしやる。そしてあとは、ご自身で聖書に習熟して、全体をガチッと有機体的なものとして把握していく。そして、

「聖書は我につきて証するものなり」

と、胸を張ってどうどうと告白する。そういう証人あかしびとになってほしい。つまり、見えないキリストを証するのが証人ですよ。そういう証人として我々は立てられている。

「聖霊、汝らに臨む時、汝らは証人とならん」

とキリストは言われた。だから、祈って待っていないと。すると、ペンテコステに聖霊がくだってきたわけですから。小池先生は、

「十字架と聖霊は一つですよ」

と言われた。十字とそれを包んでいる○。これは島津製作所の紋章です。私は島津製作所に乗り込んで行きたいくらい。

「あんた、分かっているの？ 自分のマークがどんな意味か」

と言いたいくらいです。「○の中に十字」の徴。京都にあるんですね、島津製作所は。

そんなふうには、福音の世界は楽しい世界ですから、「すべし、すべからず」でがんばらために縛られている世界ではない。

「キリストは自由を得させん為に我らを積み放ちたまえり。されば堅く立ちて

再び奴隷の軛くびきつなに繋がるな」(ガラテヤ5・1)

と、パウロは言いました。その彼にとつては「奴隷の軛」は律法なんです。なかでも「割礼」という律法だった。我々にはそんなものは関係ない。けれども、いろんなものに我々にはまわりつかれていたんです、異邦人は。いろんな宗教的な風習があったでしょ、言い伝えもあったでしょ。土着のいろんな信仰もあったですよ。

「あつちは方角が悪いからやめておきなさい。結婚式をあげるなら大安の日でないといけません」

とかね。結婚式は仏滅の日をやったら、予約がすぐとれるそうですよ(笑)。そこまでやるクリスチャンはなかなかいないね、やつぱり。クリスチャン同志ならいいですけども。片



一方がクリスチャンでないときには、向こうの親族は嫌がりますよ、仏滅の日にやったら、僕らは講演会をやる時は仏滅の日を選んで講演会をやる。

本当にクリスチャンはあらゆる束縛から解放されています。

「自由を得させんためにキリストは解放放ち給えり。二度と奴隷の軛くびきに繋がるな」

という、「奴隷の軛」とは今までの諸々の言い伝えですよ、我々から言わせたら。諸々の言い伝え、慣習、因習。そんなものによつて我々はがんじがらめになっていた。そこから全部、解放放つて、自由の世界に羽ばたけよと。

「翼をいただいて、天に昇っていく」

というイザヤ書40章の姿。ああいうものが私たちに与えられている。それは聖霊がやっつてくださる。だから、

「汝ら、心騒がすな。我を信じ、神を信ぜよ」

と。あの言葉は私は大好きなんです。人間だから心騒ぎますよ、現実にいるんなことが起こりますから。

「汝ら、心騒がすな。我を信じ、神を信ぜよ」

「はっ、ありがとうございます！」

と、これです。それからヨハネ伝16章、

「汝ら世にありては悩みあり。されど雄々しかれ、我既に世に勝てり」

「はい、ありがとうございます！」

と。そういうのが私の生き方です。「ありがとうございます」と、これしかないですよ。だから、本当にそうやって行けば、なにか非常に内側が明るくなってくる、光輝く光輝高霊者になってきます。皆さんもどうぞ、そういう晩年を——もう晩年と言っていいでしょうかね——晩年を光輝いて貫いてキリストの証人です。

「聖書は我につきて証するものなり」

と。かつこいいね(笑)。聖書はそういう本です。本当をお願いしますね。

では、これで今日は終わりいたします。

● 祈り

主さま、あなたがこの集会場を与えてくださって、素晴らしいクリスマスをもたこうして迎えることができました。ありがとうございます。本当にこのような集まる場所をいただいたということは、大きな大きな恵みでございます。ここにあなたがお宿りくださって、ここに来る方々をあなたご自身が迎えくださって、

「さあ、天国の饗宴が始まるよ」

と、いつもあなたが私たちを導いて祝福してくださることを感謝いたします。



「悩める者、痛める者、みな我にきたれ。重荷を負う者、われにきたれ、われ汝を休ません」

と、仰ってくださいましたあなたのところでしつかり休んで、

「生命をいただきたいなら、さあ証人となって、世に出ていって働けよ」と、私たちが世に送り出してくださいます。

主さま、そのようして私たちは癒され、力をいただき、生命をいただいて、また新しい出発を遂げていくような、そういう繰り返しの日々を送っております。

「世の終わりまで我は汝らと共にあるなり」

とお約束くださった主さま。見えるところによらず、見えないあなたを見えるが如くにしつかりと見つめて、歩んで参ります。どうぞ、力ある御手をもって一人ひとりをしつかりとらえ、

「我に従え、我汝を証人とせん」

として、天地一如となって進んで行くことができるように、どうぞ、お導きください。既にあなたの御許に召されて行った方々と、そして地上に残っている私たちと、天地一如となつてこの御国の道を、天国への歩みを喜びをもって進んで参ります。

主さま、感謝いたします。どうぞ、今、病んでいる方、痛んでいる方、苦しんでいる方の中に、あなたがお宿りくださつて、

「大丈夫だよ。我なり、懼るな、心安かれ。我を信じ、神を信ぜよ」

と、そのようにして励ましてあげてくださるよう。また、我ら一人びとりを然るべき場所へお遣わしくくださるようお願いいたします。

この感謝と讃美と祈り、御名にあつて御前にお捧げいたします。アーメン。

